
魔法少女リリカルなのは StrikerS 蒼空ヲ舞ウ白キ大天使

白銀の翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Strikers 蒼空ヲ舞ウ白キ大天使

【Nコード】

N3194Z

【作者名】

白銀の翼

【あらすじ】

ユニウス戦役から一年。

漸く長かった戦乱が終わり、人々は平和の世を満喫していた。

だが、混乱の火種は完全には消えなかった。

地球とプラント各地で所属不明艦隊による襲撃やテロが勃発したの

だ。

小規模な混乱が続く中、ザフト軍ヤマト隊隊長兼”FAITH”に着任したキラ・ヤマトは、デブリ帯に所属不明艦隊がいるという情報を得て、出撃するが。

一方その頃、ある魔法世界ミッドチルダでは、首謀者の名前が載る程の事件が、時空管理局のある部隊と広域次元犯罪者の戦いが始まるうとしていた。

以前に書いてた『天空を舞う自由の大天使』の書き直し版です。

キラマンセーにはしない様努力はしますが、徹底的なアンチを行いますので、作者の考えや独断、捏造が入るかも知れません。

嫌い、苦手な方は読まない事をオススメします。

自由の消失

ユニウス戦役。

壊滅した農業” プラント” の一つの” ユニウス・セブン” 落下事件、” ブレイク・ザ・ワールド” から最高評議会議長ギルバート・デュランダルが提示した” デステイニー・プラン” が発端となった” メサイア攻防戦” までの戦乱から一年が経った。

さして大きな混乱や大戦は起きてはいないが地球と” プラント” ではテロによる混乱が起きていた。

地球のそれぞれの国家の軍はザフト、地球連合の残党、オーブ問わずに連携を取り合いテロを防いでいったが、ただ一つ地球で最大の国土を持つ大西洋連邦のみが遅れを取っていた。

大西洋連邦大統領であるコープラントが、” ユニウス戦役” 末期にアルザツヘル地球連合軍月面基地にてザフトが放った” レクイエム” により駐屯していた連合軍ごと焼き尽くされたので指揮系統はズタズタになっていたのだ。

これにより、大西洋連邦の軍港や地方にある軍事都市や基地は殆ど壊滅状態に追いやられた。

デブリ帯^{ヘルト}

無数の岩塊やモビルスーツや戦艦、更に廃棄されたコロニーの残骸が浮かぶ漆黒の空間の中、一機のモビルスーツが一つの大きな岩塊に身を潜めていた。

白く輝く四肢、黒と青のツートンカラーのボディに、黄金の関節部と胸部砲口、異教の神を思わせる四本のアンテナを装備した頭部に両腰部に灰色の砲身と二本の柄、そして何より目を引かせるのはその背中に抱く八枚の深蒼の翼。

身を潜ませているにも関わらず、威風堂々としている。

このモビルスーツこそ、”自由”の翼を持つ大天使『ZGMF-X20A』ストライクフリーダムガンダム』である。

「あれだけの数の、アガムムノン級……。
しかも、モビルスーツ部隊を展開している……」

胸部にあるコックピットで、パイロットのキラ・ヤマトがごちる。

頭部にあるメインカメラには、灰色の艦隊が、左舷右舷カタパルトから無数のモビルスーツを発進させていた。

アガムムノン級は地球連合軍の戦艦なので、そのせいか吐き出されるモビルスーツ、”ウイングダム”類や”ダガー”類と皆地球軍の量産型モビルスーツだ。

だが、今の地球連合軍は……。

「地球連合軍とは違うとしたら、”ロゴス”……。
だが、”ロゴス”はもう……。
一体どこの所属なんだ？」

確かに、地球連合軍はともかく”ロゴス”はもう既に”オペレーシ
ョン・ラグナロク”、正確にはアイスランド地球連合軍基地攻略戦
にてほぼ壊滅状態になり、その”ロゴス”を仕切っていたロード・
ジブリールはダイダロス地球連合軍月面基地にてレイ・ザ・バレル
の操るZGMF-X666”レジエンドガンダム”にて搭乗してい
た戦艦、”ガーティ・ルー”ごと身を消滅させられた。

結論、まずない。

だが、テロにしてもまずこれだけの戦力を持っているとは信じ難い。
だとしたら、地球や”プラント”を襲っている軍は何者なのか？

考えるキラだが、それはすぐに中断される。

こちらに気付いたのか、数機のモビルスーツが”ストライクフリー
ダム”に向けて砲撃を放ったのだ。

「見つかった！」

キラは”ストライクフリーダム”の操縦桿を動かし、岩塊から離れ
るが、ビームの雨は止まない。

「……また警告も無しにか」

そう、通常なら何者かを確認し、警告を行い敵意か殺気があれば砲撃や射撃を行うのだが、それが一切無い。

これなら敵意が有る無しに関わらず、身と”プラント”を、そして部隊を守る為に戦うしか無い。

「くっ……………！」

迫り来るビームや砲撃を躲しながら、”ストライクフリーダム”の黄金の両手が、両腰にマウントさせてある二挺の高エネルギービームライフルを握ろうとした時だった。

「　　っ！？」

ガクン、と”ストライクフリーダム”が何かに引つ張られた様な感じがすると同時に、機体が何かに吸い寄せられ始めた。

周りの機体も、艦隊も同じ様に何かに吸い寄せられていく。

吸い寄せられていく方にメインカメラを向けて見てみれば、そこには有り得ない光景があった。

「あ、あれは……………！？」

漆黒の宇宙空間の中に、何か鋭い物で斬り裂かれた様な裂け目と、その中から白い光が溢れ出ていたのだ。

その光の中に、機体達が吸い寄せられ、吸い込まれていく。

「くっ……………！」

キラはフットペダルを強く踏み、背部のブースターを強くするが、それに呼応するかの様に吸い込みも益々強くなっていく。

更に、機体のシステムがどんどん落ちていく。

ブースターも、武装も、ハッチも、VPSも、全てが強制的に切らされていく。

まさに絶体絶命。

「うああああ!!!!!!」

そして、キラは所属不明艦隊とモビルスーツ部隊と共に、光の中へと吸い込まれていった。

こうして、キラ・ヤマトはMIA、ミッシング・イン・アクション原因不明の『戦死』となった。

邂逅 機動六課

光に吸い込まれて数分後

「……………ん、うう……………」

「ここは……………」

キラは偏光グラスで作られたバイザーに覆われたヘルメットの中で目を覚ました。

周りを見てみると、愛機のコックピット内だ。

システムは全て落ちているが、機体の方は無事らしい。

だが、故障という事も考えられる。

「よし……………」

キラは機体の電源を入れるとキーボードを出し、キータイプを始めた。

Generation Unsubdued Nuclear
Driver Assault Module……………

何時もと同じ、ガンダムのOSが開いて、機体のエンジン音と共にメインカメラが光を宿す。

「CPG設定正常、ニューラルリンクージ・イオン濃度正常、メタ運動野パラメータ正常、オールウェポンズグリーン、全システムオ

ールグリーン……。

良かった、”フリーダム”に異常は無い……」

ふう、と安堵の息を吐くキラ。

次は今の自分と”フリーダム”がいる所と状況把握だ。

メインとサブのカメラのスイッチを入れ、コックピット内が明るくなる。

だが、そこに映ったのはさっきまでいた漆黒の空間ではなかった。

「何、だ!？」

僕は今さっきまでデブリ帯にいた筈なのに!？」

そう。カメラに映ったのは白銀が連なる無数の山。

簡単に言つと雪山である。

いつの間に地球に?と思つたが青空の中には無数の惑星らしき物が映っている事から、地球ではないのが解る。

「地形識別信号も無し……。

まさか……」

地球ではない事を悟ると、キラはふう、とバイザーの中で息を吐いた。

未開の地であるなら、自分はここで誰にも看取られずに”ストライクフリーダム”と共に死に逝くしかない。

人がいて、それなりの文化や技術があるなら話は別だが。

「人、探さなきゃな……」

そう呟いた時だった。

ピーピーピー……！！

「っ！？」

いきなり響いてきた警告音^{アラーム}と向けられた冷たい刃の様な敵意と殺意に、キラは身体を強張らせると、反射的にVPSを展開。防御力が増して色付いた”ストライクフリーダム”を跳躍させた。

さっきまで機体があった所を、無数の光弾が切り裂く。

さっきのモビルスーツか！？と思い、カメラを移動させて見たが、そこには、今まで見た事も聞いた事も無い機械がいた。

紫と黒を基調とし、中央に金色のセンサーらしきものを持った楕円型の機械。

数は数機だ。

「……………へ？」

思わず間抜けな声が出てしまうが、腕や足は動き敵の光弾を躲していく。

取り敢えず向こうが撃つてきているので身を、” ストライクフリーダム”を守る為にやむを得ない。

「悪く、思わないでね……」

聞こえていないのは解っているが、キラはそう呟くと、機体の手を動かして高エネルギービームライフルを諸の手に握り、数発のビームを放った。

翡翠の灼熱の光弾は、過たず未知数の機体の装甲に当たるが、躲してきた機体が” ストライクフリーダム”に迫る。

だが、キラはこの時に普段のキラにあるまじき失態を犯してしまう。

重力があるここで、背中に装備している八枚の深蒼の翼、スーパードラゴン機動兵装ウィングを射出してしまったのだ。

「しまった！このままでは……！！」

本来、” ストライクフリーダム”は宇宙という特殊な無重力空間で本来の力を発揮する機体だ。

スーパードラゴン機動兵装ウィングは、地上では展開出来ない上に、光パルスで発生する事で更に加速する光の翼、” ヴォワチュール・リュミエール”を発生させる事も出来ないからだ。

それでも充分強いのだが、精々七割か八割くらいしか力を出す事が出来ないのだ。

だが、そのドラゴンが生きている。

命を得た様に深蒼の翼端は虚空を斬り裂くように飛び回っている。

「……………ドラグーンが!？」

キラは驚くも、キツと思考を戦闘に切り替える。

戦闘中に他の思考をするのは、それだけで自殺行為だからだ。

「当たれええ!!！」

キラの叫びに呼応するかのように、八枚の深蒼のドラグーンが目にも留まらぬ速さで複雑に動き回り、万物を死に誘う翡翠の光を放つ。

光は過たずに足元の雪ごと機械の動力部を貫き、瞬く間に爆散させていき、全滅に追いやった。

「……………何なんだ……………今のは……………？」

全滅に追いやったが、未だにブースターを噴かせ中空に浮いたまま、キラは疑問の言葉を口にする。

だが、今ので解った事がある。

ここは未開の地では無く人が住んでおり、またかなりの文明が発展している事だ。

人がいるなら、情報を聞き出せるかも知れない。

言葉が通じればの話だが。

「何処かに人がいる方向は……」

ドオオン!!

「　　っ!?!?」

いきなりコックピット内にあるスピーカーから聞こえてきた爆発音に、キラの表情に再び緊張が走る。

右のサブカメラの彼方に、爆発の証拠である黒い煙が出ている。

メインカメラを右方向に向けさせて、何倍もズームさせて見た時に、キラの表情はまた驚愕に彩られた。

その光景というのは、数機の巨大な人型兵器、キラ自身も知っているモビルスーツの内のウイングダム群と桜色の光と黄金の光を纏った女性が空中で戦っているのだ。

しかも女性達の方は見た事も聞いた事も無い武器を操り、桜色の光の砲撃や射撃、黄金の斬撃や砲撃で”ウイングダム”に攻撃しているが、人間との差を見せ付ける様に攻撃はモビルスーツの装甲表面に当たっただけで僅かな焦げ目のみを残して弾き返されている。

だが、”ウイングダム”も無論やられっぱなしではない。

右手に握ったビームライフル、シールドに隠されたミサイル、そして腰にあるビームサーベルで反撃に出ている。

これらはかなりの熱量を持っていると知っているのか、将又直感で悟っているのか女性達はオーバーな動きで躲かしているが、やられるのは時間の問題だろう。「くっ！」

無論、キラもこの状況を見逃す程の人で無しではない。

キラは突き動かされる様に、フットペダルを踏み、その場へと向かっていった。

少し時は遡り、時空管理局古代遺失物処理管理部隊にして試験部隊の機動六課は、ヘリにて初任務の現場に向かっていた。

初任務、というのは北方ベルカ自治区にてリアレールで移動中のロストロギア、”レリック”を狙いガジェットが襲撃し、列車を乗っ取った。

ガジェットを破壊しつつその列車を食い止め、また”レリック”を奪取回収といういきなりハードな初任務である。

「という訳で、新デバイスでのぶっつけ本番だけとおっかなびっくりじゃなくて思いつ切りやろう！」

「……はい……」

「……はい」

スターズ分隊の隊長である高町　なのはからの激励で新人である四人のFW陣の内三人、ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマ、エリオ・モンディアルが勇壮な返事を返すが、ただ一人キャロ・ルシエだけが不安に染まった表情をしながら返事を返す。

キャロの使役龍であるフリードは、主の心境を察したのか心配そうな顔を主に向ける。

「……キャロ」

「……はい」

なのはもそれを察したのか、キャロに近付くも安心させようとしているのか笑みを浮かべている。

何と言うか、戦闘前であるにも関わらずなのはからは緊張とかそういうのは一切見受けられない。

歴戦の勇士というが、油断なのか余裕から来ている慢心なのかというのはまだ解らない。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。
皆とは通信で繋がってる。一人じゃないから、大丈夫だよ」

「……はい」

幾分か気持ちが楽になったらしく、キャロは表情から僅かばかり緊張が抜ける。

「じゃあ、行くね。」

スターズ01、高町　なのは。
行きます！」

言うや否や、なのはは開かれたハッチから制服のまま空に向かって飛び出した。

だが、飛び降りたは良いが空中でなのはの出陣に気付いたガジェットが、なのはに向けて対空砲火を始めたのだ。

「くっ！」

まさかガジェットが対空砲火するとは思わなかったらしく、なのはは苦悶の声を出す。

直撃こそはしていないが、なのはの細い身体や長い亜麻色の髪を青白い光弾が掠っていく。

こうなるのなら、最初から相棒である”レイジングハート”を起動させておけば良かったと後悔するが、後悔する事は後からいくらでも出来る。

「っ……………」レイジングハート”、セットアップ！」

「了解！」

漸く”レイジングハート”を起動させて、バリアジャケットを身に纏い右手に杖を握るがもう既に白い頬や肩にはかすり傷が目立っている。

痛みが走るが、今はもう確認する程の時間は無いし、戦闘が始まった今、そうするのは自殺行為だ。

「行くよ！」

「はい！」

不屈の杖と共に、なのはは途中でフェイトと合流し空に展開していたガジェットの元へと飛翔していった。

それから、エリオがリニアレールから投げ出され、キャロがそれを救おうと飛び降り、暴走する為に禁忌と言われた龍召喚を奇跡的に成功させてエリオを救うという事が起きたが、何とか”レリック”を回収した時だった。

「ろ、ロングアーチよりスターズ01、ライトニング01へ！！
そちらに……あれはガジェット？」

「シャーリー？どうかした？」

「援軍だったら私達が行くよ？」

ロングアーチスタッフの一人であるシャーリーことシャリオ・フィニーノからの疑問に満ちた声の連絡により、なのはとフェイトは疑

問の声を出す。

もう既に”レリック”も回収したので後は皆で六課隊舎に帰還するだけだ。

「ロングアーチよりガジェットかは解りませんが、十二時の方角からそちらに何か迫っています！」

その数、100！」

「100?それくらいならFWの皆に任せても大丈夫だね」

「うん。」

皆疲れてるだろうけど、後もう一踏ん張りだよ」

今更援軍とは随分と嘗めた行動だと思ったのは達だったが、嘗めていたのは自分達の方だと解ったのは、それからすぐの事だった。

最初は空に塗した黒ゴマだったようだが、近付いてくるとその全貌が明らかになってくる。

ゴーグルの様なカメラに、ヘルメットの様な頭部、白と青を基調としたボディ、左腰には何かの柄、右手には黒い一挺のライフル、背中には飛行機に備え付けられる銀翼が広がっている、巨大な人型兵器。

最も近いが最も遠い場所にて、量産されている人型兵器のモビルスーツ。 ”ウインダム”である。

明らかにガジェットとは違うその様相に、二人を始めとした機動六課隊員は愕然とした。

しかもその”ウィングダム”の背後には灰色の四角い戦艦が一隻あり、艦首のカタパルトから同型機が次々に発進させている。

「……………こ、れは!？」

「……………FWの皆に連絡!

FW陣は”レリック”を持って先にへりに戻って!

先に、六課隊舎に帰還して!」

「けど、なのはさんとフェイトさんはどうするんですか!？」

「私達はこのつらを足止めする!

速く戻って!」

「は、はい!」

フェイトの鬼気迫る勢いに押され、FWは皆スバルのウィングロードでへりに帰還し、隊舎へと撤退していった。

「行くよ!なのは!」

「合点!」

頷くと共に、二人はそれぞれ相棒を携え、ウィングダム群に向かっていった。

なのは達が迎撃を始めてから数十分後。

「はあ、はあ、はあ……」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

そこには、息も絶え絶えになったなのは達と、装甲表面に焦げ目があるが起動に全く問題の無いウインダム群がいた。

二人の魔法は余り通用せず、灼熱の光弾や光刃を使い、更に連携も使うから、厄介な事この上ない。

更にそれに二乗するかのように戦艦（アガムノン級）の艦砲射撃もあり、二人を追い詰めていきリミッターを掛けたままの二人は窮地に追いやられていた。

もう二人はバリアジャケットを纏い空に浮いている事がやっとな状態だった。

「この、はあ、質量兵器、はあ、どうなってるの!？」

「なのは、ぜえ、熱く、ぜえ、ならないで……。
必ず、ぜえ、勝機が、ぜえ、あるから……」

叫ぶなのはを宥めるフェイト。

だが実際、フエイトもなのはと同じ意見だった。

時空管理局の定められた法には、質量兵器の使用を禁ずとあるが、魔法が全くと言って良い程通用しない相手にどう立ち向かえば良いのか。魔法こそがクリーンな力と考えていたが、それが根底から覆されてしまった。

考える二人だが、ここは戦場。

そんな暇等ある訳が無い訳で、二人の隙を突こうと、数機の”ウィングダム”が二人を四方八方取り囲み、止めを刺さんとビームライフルを構えた。

「……………フエイト、ちゃん……………」

「……………なの、は……………」

呟く二人だが、それを聞いたかは定かではないが”ウィングダム”が一斉に銃口からビームを迸らせようとした。

が、発射する寸前、左側の空から無数のビームがほぼ同時に降り注ぎ、ビームライフルの銃身を真っ直ぐ貫き、二人の目を灼いた。

「な、に……………?」

「……………何、なの?」

呟く二人は、自分達を救ってくれた方角に目を向け、愕然とした。

白く輝く四肢、黒と青のツートンカラー、黄金の輝きを放つ胸部砲口と関節部と両手、両腰部には灰色の砲身と柄、そして何より目を引かせるのはその背中に持つ八枚の深蒼の翼。

またしてもいきなり来た未知の機体に驚く二人だが、聞こえてきた声に安堵した。

「こちらザフト軍ヤマト隊隊長兼最高評議会議長直属の特務隊”F AITH”所属、キラ・ヤマト。援護します。至急現空域から撤退を！」

異世界に住む者達が邂逅を果たした瞬間だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3194z/>

魔法少女リリカルなのは StrikerS 蒼空ヲ舞ウ白キ大天使

2011年12月11日02時58分発行